

岡田豊日. ヨロイダニと蚊の成蟲及び幼蟲との關係, 熱帯醫學, 1 卷 5・6 號. 昭和18年 (1943)

宮崎一郎. 「シナハマダラカ」に寄生する「ミツダニ」の研究 VII. 鹿兒島醫專報, 1 號. 昭和20年 (1945)

D. 各地のだに相の調査

仲辻はこの期間に、伊豆七島、沖縄、内南洋などの蜘蛛相の研究を發表しているが、その報告中には、だにも含まれ、新種の記載がある。例えば、伊豆七島から *Ixodes hayashii*, n. sp. *I. turdus*, n. sp. *Gamasellus mikuraensis* n. sp. などの報告である。

仲辻耕次. 伊豆七島産蜘蛛類に就て. 東京農大農學輯報, 1 卷. 昭和17年 (1942)

仲辻耕次. 沖縄島及奄美大島産蜘蛛類に就いて. 同誌, 2 卷. 昭和18年 (1943)

太平洋戦争中に於ける日本蜘蛛類・ 多足類學界の動向

高 島 春 雄

財團法人山階鳥類研究所

The trend of the Japanese arachnology and myriapodology
during the Pacific War

Haruo Takashima

Yamashina's Institute for Ornithology and Zoology

内 容

I	は し が き	9
II	1941 年 の 動 き	10
III	1942 年 の 形 勢	11
IV	1943 年 の 人 と 業 績	12
V	1944 年 の 焦 燥	14
VI	1945 年 以 降	15

I は し が き

昭和11年(1936)4月1日「主として東亞の蜘蛛類に關する知識の普及及び同好の士の親睦を圖る」のを目的に東亞蜘蛛學會(The Arachnological Society of Eastern Asia)なるものが創立された。固より此の方面の專攻家同好者は日本に少いので滿10年以上を経た今日でも會員の數は200に滿たぬけれども、東亞の蜘蛛類に關する知識の普及のみならず進歩にも貢獻した所は大きかつたやうである。會則に掲げる「東亞の蜘蛛類」といふのは廣義のそれで Arachnida 或は Arachnoidea (蛛形類)を意味しウミグモやカブトガニやクマムシの研究たりとも妨けず、後には多足類關係の報文も誰憚る所なく機關誌に掲載するやうになつた。それといふのが日本でも蛛形類の研究者は同時に多足類の研究家愛好者である場合が多かつたからである。機關誌 Acta Arachnologica (1944年發行の第9卷第1/2號から蜘蛛學雜誌の副表題を附した)は少くとも現在に於ては世界に類誌の存在しないもので、其の意味では珍重せらるべき文獻であるが終戦後も刊行を續け最新號は昭和24年12月の發行日附を有する第11卷第3/4號である。日本の蜘蛛學(Arachnology)は Koch, Thorell, Simon, Karsch, Dönitz, Neumann, Loman, Ellingsen, Beier, Bösenberg, Strand, Roewer 等歐洲の諸學者により礎石が置かれたのであるが此の會が出来る頃には既に邦人學者自力更生の活躍時代になつてゐた。併し蜘蛛類だけに心魂を打ち込む學者がゐなかつたのと、頼みの綱だつた齋藤三郎博士が戦時中から病臥され元氣になられた今も蜘蛛學方面の活動を期待出来ないこと等が日本に於ける蜘蛛學の知識の普及に大きな妨けとなつた。日本に於て何故蜘蛛類(狹義)に關する知識の普及が昆蟲などに比して劣るのか、其の理由を「生物」vol. iii, no. 5, p. 193 (1948) に挙げたことがあるが其の時の5理由にもう一つ次の理由をつけ加ふべきであらう。即ち世俗昔から蜘蛛を不吉な事件の前兆と考へたり、其

の姿や動作から氣味悪がり或は囓まれて危害を受けると誤認することなどは一般人士を蜘蛛の世界に親しませなくするのである。

Ⅱ 1941年の動き

クモの生活史が地方の篤學者により次第に究明されて来る。長野縣の千國安之輔氏の「脱皮を中心とするデヨラウグモの一生」(Acta Arachnologica* 6-1: 1-9**) は其の1例である。又縣單位などで所産蜘蛛の分科目録を編成發表する傾向が盛になつて來た。これは蜘蛛研究の初歩の過程であるが同好者を刺戟するに足るものである。堀關夫氏、細野善熙氏等文學者で自然觀察に熱心な人々がクモの生活にも目を向け此の年あたりから觀察記録が諸誌に發表されるやうになつた。クモの手頃な圖鑑がいつまで経つても現れないので A. A. 誌では關口晃一氏に囓し毎號少しづつ普通種の圖説を續載することになつたが、前年と今年とで21種を圖説して中絶したのは惜しい。圖説の無い憾みは今日になつても解消してをらぬ。

ミズグモ *Argyroseta aquatica* (Clerck) は日本では1931年3月に京都深泥ヶ池附近で雌雄1對が採集されたきりであるが、今年の夏北海道厚岸の北大臨海實驗所附近の沼澤地からも採取され、齋藤三郎氏が形態・習性に關する短い報告を公にし此の種が日本の spider fauna に入るべきことが確認された (A. A. 6-4: 117-120)。

此の年の收穫は千國氏、吉倉氏、齋藤氏の勞作が夫々出版されたことである。千國安之輔氏は「日本アルプス山系の蜘蛛」と題するA5判本文163頁、別丁圖版29面の本を信濃教育會南安曇部會から出版した。昭和12年(1937)から4年の間に約10萬匹を採集したといふ。當時の日本全土から未知、或は從來北千島だけから又は北海道だけから知られた種類などが氏の採集品の中に在る。垂直分布に關する事項なども有益である。吉倉眞氏は樺太產コガネグモ類を纏め見事な原色圖を作成してゐたがそれを「樺太產蜘蛛類 黄金蛛科 生態と分類」(樺太中等學校學術研究會論文 第一輯)として出版された。時局柄こんな簡素な姿で印刷されたのは残念である。6屬30種のクモを記載したが中に樺太未記録種11、日本新記録種5があつた。齋藤三郎氏は「日本動物分類」の1冊と

* 以下 A. A. と略記する。

** vol. vi, no. 1, pp. 1-9 の意味。以下も同じ。

して「蛛形綱真正蜘蛛目 (I) 新虎亞目 四氣門類 三爪類 I」を三省堂から出版した。本文索引共220頁挿圖233、既刊の (I) 古虎亞目に續くもので多くの日本産クモを簡明に記載し斯學の進歩と普及に資することが大きかつた。惜しむらくは此の2冊目きりで中絶したことである。残りの部分の原稿既に完成してゐると戦後仄聞したが出版の手だてはないものであらうか。

クモやメクラグモの新群の記載も盛に行はれた。仲辻耕次氏が「伊豆七島産蜘蛛類に就て」(東京農業大學輯報 1-4: 287-328)の題下に伊豆七島産蛛形類を纏め、鈴木正將氏がミクロネシアの盲蛛を検し邦人學者として南洋産盲蛛類に關する最初の報文を提供した如き其の例である。又三好保徳氏による盲蛛類の形態或は習性を扱つた一聯の勞作は著しい (A. A. に掲出)。1939年頃から佐藤井岐雄・鈴木正將両氏による日本産盲蛛類の分類地理學的研究が開始されたが三好氏のはそれに呼應するものである。鈴木氏は5屬5種の邦産盲蛛類につき染色體を研究した成果を動物學雜誌 53-2: 101 に略報したが、右は日本に於ける先驅的役割を果すものとして刮目させられる。佐藤氏は天草島の南端牛深での野外觀察と其の後の室内觀察とでサソリモドキに關する詳細な習性記事を發表した (A. A. 6-3: 72-87)。挿入された寫眞も貴重である。

次に多足類方面では高桑良興氏が各地の多足類に就き査定報告を綴り其の研究は愈々佳境に入つた感がある。既に唇脚類は日本産の種類は殆ど全く判明し、高桑氏は主力を従來手薄だつた倍脚類の解明に注ぎ、それも此の年あたりで全貌を大観出来るやうになつた。氏による日本の多足類全體の纏めは次第に完成に近づきつゝあるが「日本動物分類」中の多足類關係第3冊として「唇足綱改形類イシムカデ目」が出版された。A5判本文索引共104頁。

II 1942年の形勢

長野縣の小松敏宏氏は優れた蜘蛛研究家で度々力作を發表してゐる。カキネグモの習性に關する報文 (A. A. 7-1: 1-6)、長野縣下の最勝洞といふ洞穴の動物を調査し洞窟棲クモの形態と習性とを記述した報告 (A. A. 7-2: 54-70)等は其の例である。

クモやメクラグモの新群の記載は前年同様盛であつた。仲辻氏の諸報文は中にも著しいものである。又植村利夫氏は北海道から始めて知られるトタテグモをエゾトタテグモ *Acattyma yesoensis* なる新種として記載し (A. A. 7-1: 31-35)

これに近縁のカネコトタテグモ *Acattyma roretzii* L. Koch をも詳しく再記載した。然るに此の年山本源三郎氏がカネコトタテグモの從來未知だつたるを採集し棲息環境及び習性に關し有益な知見を發表したので (A. A. 7-3/4) エゾトタテグモはカネコトタテグモのものと同一物ではないかとも考へられ今後の再檢が望まれる。高島は1941年 *Biogeographica* や A. A. に日本産蠍類・脚鬚類の分類地理學的報文を發表したが、此の年も日本及び南方諸地域の両類關係の報告を公にすると共に太平洋戰爭勃發以來南方諸地域の所謂毒蟲が一般人士の注意を惹くに到つたのでサソリを中心に其等に關し幾つもの啓蒙記事を書いた。三好氏の盲蛛研究の成果は今年も4篇程印刷された。

高桑良興氏と高島は内南洋産多足類を概觀し (材料は江崎悌三氏が1936年から1940年にかけて採集したものである) 尙沖繩本島首里産の標品に基き日本にもフサヤスデ類の棲息することを證明した (A. A. 7-3/4: 120-124)。トウマフサヤスデ *Monographis kraepelini* Attems がそれである。而して終戰の年神奈川県江ノ島で同屬の別種が見つかり而もそれは日本の各地に弘布してゐることが判明したのは奇縁である。此のはうは後にハイボクフサヤスデ *M. takakuwai* Miyosi と命名された。高桑氏は「我が南洋群島の多足類」と題し科學南洋 5-1: 11-44 に發表、内南洋産多足類に纏まりをつけた。内南洋未記録種 2, 新種 9 を含んでゐる。他に高桑氏による日滿産ヤスデの新屬新種の發表があつた (動叢 21-1: 39-47)。

牧野佐二郎氏は新山英二郎氏と共に アカヅムカデ の染色體を研究し $2n=28$ (精原細胞), $n=14$ (第1及び第2精母細胞) なることを明かにした (遺傳學雜誌 18-1: 34-40)。日本では初めての研究である。

IV 1943年の人と業績

關口晃一氏は「アシダカグモ *Heteropoda venatoria* Linnaeus の生活史に就いて」なる報文を A. A. に連載した。* 之は確かに此の年の收穫の一つである。萱島泉氏は馬來半島クーランボに赴任してからの第1業績として「馬來産ヂョロウグモモドキ屬に就て」を臺灣博物學會會報 33-242/243: 594-602 に發表した。主として馬來半島産マラバルヂョロウグモ *Nephilengys malabarensis* (Walcken-

* 最終の部分は A. A. 9-1/2 (1944) に載つてゐる。

aer) に就き記載してあるが邦人學者の占領地現地での研究報告の一つとして注目すべきである。

仲辻耕次氏は滿蒙產盲蛛に關し動雜 55-3: 103-113に、内南洋產蜘蛛類及び沖縄・奄美大島產蜘蛛類に關し東京農大農學輯報 2-1: 147-180 & 181-194 に夫々報文を寄せクモやメクラグモの新種或は新屬を發表した。氏は其の後應召遂に戦死されたので農學輯報に載る之等の2報文が絶筆と同様になつた。

細野善熙氏は「蜘蛛の習性」と題する一書を日新書院から出版した。本文333頁口繪16面。火災保險のことを本職にしながら不斷の努力で蜘蛛學者も書かなかつた成書を提供したのは偉とすべきである。

高島は日本產全蠍目及び脚蟷目の綜説を發表した(A. A. 8-1/2)。佐藤井岐雄氏はキョクトウサソリの精子發生に關し極めて優秀な論文を1941年に發表、*之が氏の學位論文の主論文になつたのであるが其の後全蠍目に近縁のサソリモドキを材料として細胞學的研究を行ひ發見する所が多かつた。此のはうは戦争が災してキョクトウサソリの場合のやうな成果を擧げるに到らずして非業の最期を遂げられた。氏はサソリモドキも又一つの興味ある分裂形式を有することを確かめた。前年(1942)の秋仙臺に於ける日本動物學會大會にその精子形成物質に就き講演したが、此の年東京に於ける同大會には「精子完成に關與する細胞有形形質」と題し講演した。他に氏の此の方面の業績で印刷に附されたものに「絲粒體及びゴルジ體分裂に關する研究 1. サソリモドキの性細胞に於ける絲粒體分裂」(醫學と生物學 2-11: 599-602 1942)「絲粒體分裂の一形式」(科學 13-2: 59-60 1943)等がある。蛛形類の細胞學は佐藤氏、鈴木氏等廣島文理大に於て大いに發展を見んとして盟主格の佐藤氏を喪つたのは惜しい極みである。

多足類關係では高桑良興氏が「日本產ゲジの種」なる報文を發表(A. A. 8-3: 50-58), これにより日本產多足類の内唇脚類は全部纏つた。氏は倍脚類のはうも種類調べは一段落となつたので餘勢を馳つて「我國に於ける唇足類及び倍足類の分布」なる論攷を脱稿、それが此の年日本生物地理學會會報 13-20: 147-213

* Studies on the Cytoplasmic Phenomena in the Spermatogenesis of the Oriental Scorpion, *Buthus martensii*, with Special Reference to the Structure of the Chondriosome Ring and the Dictyokinesis—J. Sc. Hiroshima Univ. Series B, Div. 1, vol. 8, Art. 1 (1940)

に無事印刷されたのは學界の爲慶賀すべきである。但し此の中で氏の所謂「本州」は本州・四國・九州を含めた地域であるから觀る人は注意を要する。本土と同じ意味である。日本産結閤類（微小多足類）を形態學的に發生學的に詳しく研究した人がなかつた。北澤淺治氏が「本邦産結閤類（Symphyla）の觸角節數の研究〔1〕-〔2〕」を植物及動物 11-8 & 9 に發表したのは偉とすべきである。

V 1944年の焦燥

戰況日毎に悪くなり前線では後退の一途で、日本本土の空襲も6月及び7月に北九州に熾烈に行はれ、12月1日には首都東京にB29が姿を現すに至つた。會合は不安になり文獻活動も資材勞力の不足から次第に狭められ學者は研究の成果を空しく筐底に藏するの他はなかつた。學術雜誌など編集者の手許で編集を終つたまゝ或は印刷所にはいつたまゝ動きがとれなくなり、ひどい場合は印刷所の戰災で烏有に歸した。斯うして此の年あたりから1948年頃まで奥附の發行日附と實際に印刷終了して配布になつた日附とに酷い食ひ違ひを生ずるやうになつた。A. A. の1944年分は第9卷第1/2號のみであるが之も永らく停滯して實際に刷り配布されたのは終戰後の1945年10月であつた。何れにしても此の年の發行日附を持つ印刷された論文は4~5篇に過ぎない。

關口氏の「アシダカグモの生活史に就いて」は此の年で掲載が完結した。氏は別にアシダカグモを材料にして「蜘蛛卵の調節能力」を動物學雜誌 56:8-10-12に發表した。短篇だが日本では斯ういふ方面の業績は殆ど無いので注目値する。三好保徳氏は例により伊豫の皿ヶ嶺での觀察に基き「サラアゴザトウムシ *Sabacon sato-ikioi* に關する 2, 3 の知見」「皿ヶ嶺の盲蛛とその越冬について」なる2力作を A. A. 9-1/2 に發表した。當時遠く占領地に在つた萱島泉氏が赴任前に纏めて置かれた「臺灣の蜘蛛」が此の年高雅な體裁で東都書籍株式會社から出版になつた。臺灣の屋内や屋外に見られる代表的蜘蛛を圖示し形態や習性を記したものである。B5判68頁、卷頭の圖版21葉。

多足類では高桑良興氏と高島は曾て公表した「朝鮮産多足類の概觀」と題する報文の補遺として「朝鮮産多足類の概觀Ⅱ」を公にし（A. A. 9-1/2: 22-32）主として倍脚類を整理した。特筆すべきは日本産多足類の研究十有七年の高桑良興翁が11月29日附理學博士の學位を受領なさつたことである。多足類の研究で學位を獲た日本最初の人であり又時に72歳であつたから日本で斯かる高齢で

理學博士になつた御方も始めてだと想ふ (A. A. 10-3/4 参照)。茲に厄介な問題は高桑氏の學位論文の一部になつた日本産倍脚類を全部記載した報文 (三省堂の「日本動物分類」の1冊として此の時既に校了までに進み其の校正刷1冊を提出されたのである) の處置である。中に多數の新屬新種を含むと共に既知種を總攬してあるらか日本のヤスデを知るのに最も便利な文獻であるが、印刷所の戦災から校正刷が3部程残つたきりでそれから先どうにも進められなくなつた。之等の新屬新種は1944年中に間違いなく印刷發表される段取りであつたがさう行かなくなつて私達は今日取扱ひに困じてゐる。

Ⅶ 1945年以降

京都、奈良、札幌其の他少數の都市を除けばどこも完膚無きまで空襲を受け研究者も生きるか死ぬかの境地を彷徨し、若手は多く戦野に驅り出され、會合は警報の發令に絶えず脅かされて次第に回數が減り、印刷所の相次ぐ被災に學術雜誌の刊行など想ひも寄らなくなつた。4月中旬の東京大空襲に東亞蜘蛛學會の事務所が全焼して會誌のバックナンバーは消失、福井玉夫氏、植村利夫氏、高島など同學會の役員も自宅全焼で多年蒐藏に力めた文獻標本を喪つた。高桑良興氏は前年末 (1944) 松山市に疎開、文獻標品を同地に全部送つたが松山の空襲で一部を失つた。之等の貴重資料をよく守り通した三好保徳氏は勤務學徒の監督教官として出勤中、一夜宿直室に煉炭中毒を起しそれが基で右手に大火傷し満足な指は1本を残すのみといふ慘事を招來した。仲辻耕次氏は比島戦線に加はりセブ島で戦死、鈴木正將氏は永きに亘つて研究生活から引き離され、佐藤井岐雄氏は廣島の原子爆彈攻撃に令夫人と前後して戦災死を遂げ、淺沼靖氏は資源科學研究所の焼失で苦心の論文原稿を滅し、齋藤三郎氏は永く臥床して煩悶なされた。

8月15日遂に終戦となつた。それから半歳は日本に大混亂を來したが、文獻や標品を失つた研究者は身邊が落ちつくに連れ悔は長く深く假屋に結ぶ夢にもこし方を想ひ浮べては嘆きを新にした。疎開した文獻器械を容易に取り戻すことが出来なかつたりして研究者は研究室の復舊整備に能率の悪い努力を續けることが多かつた。吉倉眞氏は樺太から命がけで脱出し、萱島泉氏は雄圖空しく馬來半島から郷里に引揚げた。斯かる中にあつて蒲生重男少年が9月20神奈川縣江ノ島に採集して珍奇多足類フサヤスデの1種を多數發見したのは大手柄で

之は後に (1947) ハイボクフサヤスデ *Monographis takakuwai* Miyosi と命名されたものである。

東亞蜘蛛學會は災後事務所を東京文理大動物學教室に移し後更に現在の山階鳥類研究所内に移つた。未曾有のインフレーションの到來に困つゝ會誌を戦後6冊出した。斯界の元老岸田久吉氏は戦時中京都の郷里に疎開、東京の御宅は無事であつた。鈴木正將氏は廢墟と化した廣島文理大の復興に復員後大いに努力し既に現在はクモ及びメクラグモの分類地理學的及び細胞學的研究を進めてゐるのは偉とすべきである。キムラグモの核型の決定など氏の戦後の收穫である。三好保徳氏は不具となつた右手を左手に切り換へ高桑氏の衣鉢を繼ぐ人として益々多足類の研究に勵んでゐる。高桑良興氏は昭和23年 (1948) の秋漸く東京の自宅に戻つたがすっかり老境に入られたのは残念である。淺沼靖氏はダニの研究家として確固たる地歩を築き、森川國康氏はクマムシ (緩歩類) の分類學研究に精進し、關口晃一氏はクモの發生學的研究を發展させてゐる。新制高等學校生徒の中にクモ類愛好者も現れんとし、蜂類研究家として令名ある常木勝次氏の「クモの生活」 (札幌講談社刊 1947) といふやうな初心者入門書として優れた本も上梓された。戦時中ずつとお預けになつてゐた「日本動物圖鑑」の改訂増補版も1947年末遂に出版完了となり、其の中に盛られた蛛形類多足類は數からいつたら到底満足出來ないものであるが、やはり知識の普及には今後永く貢獻をすることゝ想はれる。1945年の發行日附を持つ刊行物に印刷された斯學關係の報文は誠に少かつた。目星しい物を拾ふと關口晃一氏は「アシダカグモの生活史に就いて (補遺)」として脱皮の回數及び越年に關するノートを A. A. 9-3/4 に發表、高島は「東亞地域に於ける全蠍目」を同じ號に公にし所謂「大東亞共榮圈」産152種を列舉、森川國康氏は「四國產蜘蛛類・多足類目錄」なる謄寫印刷の目錄を自刊した。ダニを除き 326 種の分科目録で此の努力には敬意を表さねばならぬが印刷不分明なのは惜しい。

1941~45年の間に發表された日滿産新種新屬などの新群は1941年に眞正蜘蛛類に5種1變種、盲蛛類2種、唇脚類4種、倍脚類2屬30種1亞種、1942年に眞正蜘蛛類に1種、盲蛛類1屬3種、唇脚類4種 (他にジャワ産1種)、倍脚類19種1亞種 (他にフィリピン産1種)、1943年に眞正蜘蛛類に6種、盲蛛類1屬3種、倍脚類2屬3種、1944年と1945年とは新群の發表は無かつた。

A. A. には日滿産蜘蛛類（眞正蜘蛛類と盲蛛類）や多足類關係の文献目錄を殆ど毎號連載して來た。本稿中に引いた諸業績の内容を更に詳しく知らんと欲する御方には其等の文献目錄の参照が多少はお役に立つであらうと信ずる。ダ=類に關し殆んど全く觸れなかつたのは文献涉獵に自信が無かつたのと、別に淺沼氏がダ=類だけを採り上げて本稿と歩調を合せたものをお書きになるからである。
(昭和24年1月31日稿)

Notes on the Scorpion of New Guinea

by

Haruo Takashima

Yamashina's Institute for Ornithology and Zoology

From January to June, 1943, Mr. Tarō Niimura of the Zoological Section of the Tokyo Science Museum made a scientific exploration in the western New Guinea, and after much effort, collected many animal specimens including several scorpions. In February, 1944, sixteen of Niimura's specimens preserved in twelve bottles were loaned to me for investigation. In addition, eleven scorpions collected by Mr. Toyohi Okada of the Medical Department of the Taihoku Imperial University during the malarial investigation in the eastern New Guinea for half a year were given me in December, 1943. Moreover, in February, 1944, I was fortunate enough to be able to examine four specimens lent to me by Dr. Kojiro Kato which have been collected by a certain army surgeon at Rabaul, the capital of New Britain.

On identification of these specimens I am able to determine what species of scorpions are commonly met with in New Guinea. My thanks are due